

No-Longer-Wall Walk: バレンシア市壁解体史を通じた「不在」の境界の観光価値

37236095 高井 千春

0. 序

0.1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、欧州の中規模都市において忘却された市壁跡地の価値を再発見することである。従来の観光は現存する遺跡の視覚鑑賞に重きを置くが、物理的に「不在」の市壁も都市に何らかの痕跡を残しており、それを辿って歩くことで都市の新しい一面が発見できる。本論文では、スペイン・バレンシアを事例に著者が提案する新しい市壁観光: No-Longer-Wall Walk の価値を検証する。

0.2. 研究の対象と方法

バレンシア市 (Municipio de València) の3つの市壁のうち、11世紀・14世紀に建てられた市壁周辺の都市史を研究対象とする。古代ローマの市壁は配置について専門家の見解が一致していないため分析の対象外とした。

自治体の公式観光情報サイトなどから先行事例を収集する。既往研究に基づき、バレンシア旧市街の機能分布と市壁跡地の現況を重ね合わせて分析する。また、17世紀以降の古地図をトレースし、都市境界の変遷を明らかにする。

0.3. 既往研究と本研究の位置付け

バレンシア都市史の文脈では、最も関連が深いのは [1] の3つの市壁史を包括した博士論文である。本論文は、同著が示した第三の市壁完成に至る歴史の後に続く、市壁解体史を明らかにする。他に [2] や [3] など都市全体や壁外居住区に関する研究も参考にした。都市観光を論じた先行研究には、[4] の「Dérive (漂流)」を元にした [5] などがある。本研究はこれらの理論的基盤をもとに [6] の「Counter tourism」と [7] の「Absence Heritage」を重ね合わせ、既存の都市観光および遺産保存の概念を拡張することを目指す。[8] の市壁の社会的意義に関する議論も参考にした。

0.4. 用語の定義

市壁 : 英語の“city wall” やスペイン語で防御壁を意味する“muralla”を指す。「城壁」に対し都市全体を囲って境界を決定する構造物である。バレンシアの紀元前2世紀共和制ローマの壁を「ローマ市壁」、11~13世紀イスラム勢力の壁を「イスラム市壁」、14~15世紀アラゴン王国下の壁を「キリスト教市壁」とする。

Wall Walk (以下 WW) : 現存する市壁上通路、または市壁や市壁跡地沿いの道歩く従来の観光ルートの総称とする。欧州ではさまざまな名称の先行事例が多く見られる。

No-Longer-Wall Walk (以下 NLWW) : 遺構が現存しない区間も含め、市壁の軌跡を全て歩いて辿るルートを指す。点状の遺構を線で繋いで移動する従来の跡地ルートを拡張し、市壁の残存度合いによって異なる空間特性および、物理的遺構がないからこそ生まれる体験にも目を向ける。

0.5. 本論文の構成

第1章ではバレンシアの市壁の歴史と現状を整理し、他都市との比較を通してケースとしての普遍性を評価する。第2章では都市機能の空間分布から従来の観光地と市壁跡地の観光体験を比較する。第3-4章では市壁が保存された場所と市壁跡地の差異に着目する。3章では歩行という行

為と市壁跡地の関係を考察した。4章では市壁解体前後の周辺都市史から、跡地特有の空間特性を明らかにした。

1. 欧州とバレンシアの市壁の現状

1.1. 欧州の Walled Cities と Wall Walk

早くに発展が止まった小規模都市では市壁が残り観光資源になりやすいといわれる[9]。そこで規模に応じた市壁の観光利用事例を欧州の11都市で調査し、中規模都市での普遍的な状況と課題を精査した(表1,図1)。中規模以上の都市ではバレンシアのような同心円の複層的な市壁が多い。大都市では遺産の観光需要が大きく、解体された市壁でも遺構が注目される。一方中規模都市では市壁が残っていても要塞や城門などの一部分しか注目されず、残存していない市壁は観光ガイドではほぼ言及されなかった。

1.2. バレンシアの市壁の歴史

最初の市壁はBC138年のローマ入植後、Turia川中洲の高台に築かれた。1-2世紀に都市が壁を超え広がり、南東に建設された競技場が新しい都市境界を定めた。3世紀の衰退期には競技場の南北壁と洪水の多い市壁の西側部分のみ残り、6-7世紀西ゴート都市および初期イスラム都市の東西境界を成した。9世紀に市域がローマ時代を越え、11世紀にイスラム市壁建設。ローマ競技場の基礎も活用された。直後も多くの壁外集落が形成され、職人の工房が集まった。12世紀に南壁が拡張・補強されてイスラム市壁が完成。1238年のJaime Iによる征服後、モスクは大聖堂に寄進され教会に転用されたが、イスラム市壁は新市壁が完成するまで機能を保ち分配されなかった。都市はイスラム市壁を大きく越え、郊外に修道院が多く建設された。キリスト教市壁はカスティーリャ戦争前1356~62年に土で築かれたが1398年頃モルタルで再建。関税徴収も市壁の重要な機能であり、成長を見込んで余裕を持った範囲設計だった。イスラム市壁は私有化・解体され、入り組んだ街路も改変された。キリスト教市壁は15世紀まで記念碑的に再整備され、その過程でSerranosとQuartの塔が追加された。一部の様式改変を除き全体の配置は変化しないまま19世紀まで保たれた。鉄道建設を契機に解体が始まり、1869年までにほとんどの壁が取り壊された。

1.3. バレンシアの市壁の現状

ローマ市壁 : 旧市街中心部のLa Almoína博物館に他の古代遺跡と併せて保存・展示される。他の断片的遺構の一部は路上で確認できるが説明展示はない。

イスラム市壁 : Tossal博物館が唯一の総合展示だが開館時間が限定的。遺構の多くは隔壁として断片的に街区に取り込まれ、発掘・見学困難な場所も多いが教育機関や飲食店などで数箇所展示されている。El Carme地区に屋外放置された遺構が多い。同区のValdigna門のみ現在も通行可能。

キリスト教市壁 : 2つの門塔以外ほぼ壊され環状道路になった。Serranos塔は都市のシンボルとして人気観光地だが歴史説明は乏しい。Quart塔に市壁のごく一部が繋がって残る。Colón駅で門の遺構が屋外展示されるほか、MuVIMやIVAMなど文化施設で壁の一部が見られる。

表 1 バレンシアと欧州 11 都市の市壁現況・歴史比較表

| 都市 | 国 | 人口 (万) | 市壁残存率 (km/km)** | Wall Walk | 公式観光情報・マップ | 世紀 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------------|-----------|--------------------|--------------|------------|-----------------------|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|--|--|--|--|
| | | | | | | -5 | -3 | 4 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | | | | | |
| 1 | Carcassonne | 仏 | 4.6 | 1.5/1.5 | ○ | ガイドマップでWW言及 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | Ávila | 西 | 6.2 | 2.5/2.5 | ○ | WW独立サイト | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | Tarragona | 西 | 14 | 1/3.5 | ○● | WWパンフレット、「見えない壁」ルートも | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | York | 英 | 20 | 3.4/3.4 | ○ | WW独立サイト・パンフレット | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | Florence | 伊 | 36 | 2.5/8.5 | × | マップに残存部分、城門含むルートあり | | | ○ | ○ | ◎ | | | | | | | | | | | | |
| 6 | Sevilla | 西 | 68 | 2/8.7 | × | マップに残存部分の一部、城門の紹介 | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | Marseille | 仏 | 87 | 1.8/5.9 | × | 要塞のみ紹介 | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 | Valencia | 西 | 84 | 0.4/2.6 | ● | イスラム壁公式ルート | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | Barcelona | 西 | 171 | 0.5/7 | ● | 市立博物館の2つのルート、路上パネル | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 10 | Madrid | 西 | 347 | 0.1未満 | × | イスラム壁一部含むルート | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 11 | London | 英 | 895 | 0.5/5.1 | ● | 考古学トラストのWW/パンフレット、パネル | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 12 | Athens | 希 | 64* | 0.1未満 | ● | 「失われた壁」ルート独立サイト+アプリ | ◎ | ◎ | | | | | | | | | | | | | | | |

*市の人口。首都中央部の人口は約100万人

**太字で示した市壁のみが計算対象。細字はほぼ現存しない

○ 保存された壁ルート ● 失われた壁ルート

◎ 建設された市壁の数 D 大規模解体

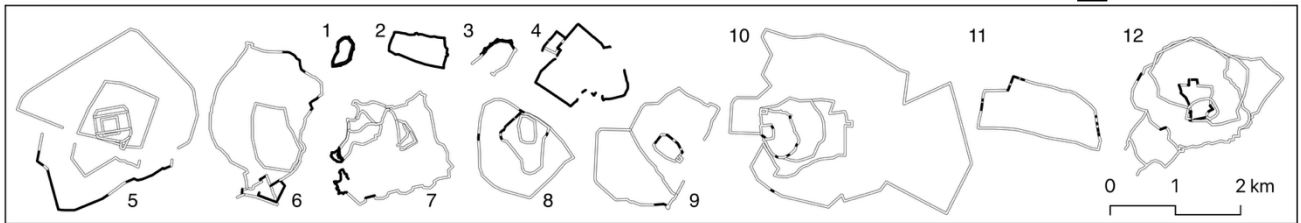


図 1 表 1 に示した都市の市壁の配置と残存度（黒線が現存する市壁、白線が市壁跡地）

1.4. バレンシアの市壁への認知

住民の視点: 住民 50 人に行ったアンケート調査では[1]、市壁の数とおおよその規模は半数以上に知られているものの、現存する門塔などの市壁・年代に属するの把握する人は少なかった。また、現地の大学生が書いたメンタルマップには、3 枚全てにキリスト教市壁跡の環状道路が表れたがイスラム教市壁の要素は全く無かった[10]。Serranos と Quart 塔も大聖堂などと並び正確に描かれた。

専門家の視点: [1]の最終章では現行の保存方法への批判と改善案が述べられており、著者は現存する遺構を結びつける包括的な計画の欠如を指摘した。遺産保存を専門とするバレンシア工科大学の Esteban Chapapria 博士は「歴史を効果的に伝える手法が欠如しており、市壁の解説は未解決の放置された課題である」と意見し、3 つの門の遺構を中心に市壁の全体像の啓蒙の必要性を説いている(私信, 2025)。

1.5. 小結

バレンシアの市壁の大部分は失われたか外から見えない街区内に取り込まれており、線としての文脈は城門と切り離されて忘れられている。専門家は遺構の保存状態の悪さと歴史説明の欠如に危機感をもっている。他都市との比較を通しては、先行事例として小都市の市壁ルートと大都市の市壁遺構ルートがあること、中都市では失われた市壁が活用されていないことが明らかになった。

2. 市壁跡地の観光特性

2.1. 背景と目的

観光客向けに囲い込まれ、安全で標準化された空間は“Tourist bubble”と定義される[11]。観光対象の真正性と演出に関する議論は 1970 年代に始まり [12]、近年の研究では成熟した観光客は記念碑を見るよりも地元の日常に魅力を感じ、郊外に移動するといわれる [13]。この章では、市壁跡地は観光地区の周縁であり、歩くことでバブルの外側の「ローカルな」魅力や多面性が感じられるルートであることを示す。

2.2. “Tourist Historic City”モデル

典型的な人口数十万の中規模多機能都市の歴史観光モデルを示した[9]によれば、中世の都市は概ね中心から外側に向かって拡大したが、遺産保存運動の始まりを契機に歴

史的地区(HC)と中心的商業地区(CBD)が分離し、観光地区(TC)は両者の恩恵を受ける中間部分に位置する。著者は地形や文化による変種を認めており、水辺都市では CBD が内陸へ移動し水辺に「歴史的放棄地区」が生まれやすい点や、スペインでは中世前期以前の HC と以後の CBD が Plaza Mayor を結節点に早期から分離しやすい点を指摘した。

2.3. バレンシアの都市機能分布

前節の分析方法に倣い、HC の要素として指定文化財 BIC と BRL¹を、TC として文化娯楽施設来場者数²および 22 の公式推奨ルート³を、CBD として飲食店や娯楽施設⁴をマッピングし、それぞれが集中する場所を図 2 にエリア分けした。また、ローカルな商業活動の分布を調べるため、生鮮食品やスーパーマーケットの位置も示した。

①大聖堂から②中央市場広場の間と、高速鉄道が停まる④北駅周辺が THC の中心地である。TC に対し CBD は南



図 2 バレンシアの現在の都市機能分布

東にずれており、③市庁舎広場や⑧Colón 駅周辺は地元住民が集まる繁華街だ。一方②⑤間は中小店が多く、周辺 El Carme 地区はイスラム壁外集落由来の入り組んだ路地にアフリカ系移民が多く住む下町で、一種の「放棄地区」である。④の西に広がる商業地区は、市内最大のアジア系人口を抱えるチャイナタウンとして知られる。⑥Quart 塔北側、⑦元病院庭園は修道院跡地で文化施設が集まる。⑨周辺は複数の歴史的建築物に公的機関が入っており、広々と落ち着いた雰囲気がある。⑩は下町から近年急速に開発が進んだ Russafa 地区で、郊外観光地誕生が示唆される。

2.4. 小結

イスラム市壁の東西は従来の観光地境界に一致する。キリスト教市壁沿いには4章で詳述する経緯から文化施設が集まる。また、旧市街を迂回する地下鉄駅も必然的に市壁沿いに建てられ、繁華街が形成される。さらに、⑤②や⑥⑦間、④東側などの移民街や下町も歴史的に周縁に集まりやすい。以上から、市壁跡地を一周すると図2で分類した多様な地域を網羅した観光体験ができる。かつての都市の周縁を歩くことで、Tourist Bubble の外に出て都市の多面性を感じられることがわかった。

3. 都市を歩く能動的体験の考察

3.1. 背景と目的

西洋の観光地は「浄化された飛び地」であり、目的地への移動に最適化されたことで、視覚以外の身体的な感覚が麻痺させられた一方、障害物の多い廃墟の歩行は即興的・表現的身体性を回復させるといわれる[5]。また、物語を用いて観光客の主体性回復を目指す Counter Tourism の提案もなされている[6]。本章では、目に見える遺構に偏重する従来の WW に対し、失われた市壁の軌跡全体を歩こうとする試みが歩行者の五感を使った即興的・能動的な動きを引き出すことを明らかにする。

3.2. バレンシア市壁跡地の歩行体験

イスラム市壁とキリスト教市壁の歴史上の軌跡に可能な限り近くよう現在の街路を歩いた際の経路を図3に示した。前者は大部分が街区に取り込まれたが、中世でも水路として使われ続けた堀は道として残りやすかったため、壁の代わりに堀を辿る経路も含めた。一方後者は同時期に壊され環状道路になったため、完全に歩いて一周できる。ここでは、時に回り道をして宝探しのように遺構を見つながら歩くイスラム市壁での体験に注目する。図3から、イスラム市壁の軌跡を辿ると街区を回り込んで進むことになり、堀の軌跡も合わせて多数の選択肢が生まれる。また、市壁南西部の市壁跡と堀跡を行き来する経路の2例を図4に示した。市壁で囲われるのは高台で、堀は自然地形の河川跡を利用して作られた。目に見えないかつての防衛線の存在を地形から感じられることがわかる。

3.3. 小結

歴史という意味づけと、目に見えない遺産に近づこうと経路を探ることが、NLWW と [5] [6] のような能動的体験の共通点になる。本章では記念物として観光資源になっておらず、日常に溶け込んだ古い時代の市壁跡地を分析した。このような遺産は従来保存状態が悪く観光評価が低い傾向があったが、その隠された遺構と痕跡を辿ることは五感を使った身体的な探索につながり、従来の都市観光にはなかった「宝探し」的価値があることが明らかになった。ただし、この議論はキリスト教市壁のように大部分が完全に失われ、道路として整備された壁には通用しない。そのような場合については次章で論じる。

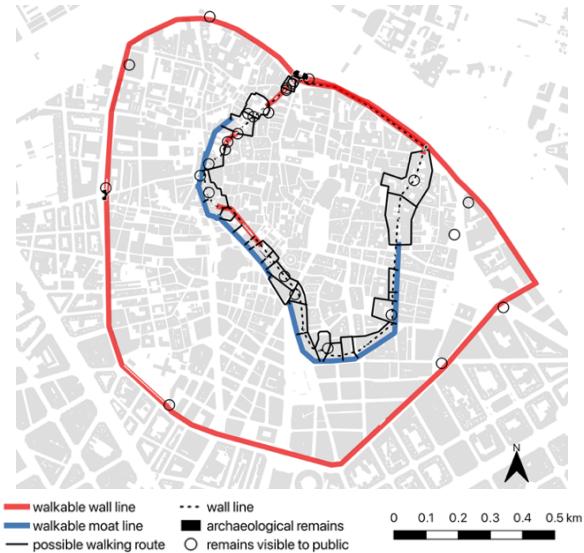


図3 2つの市壁跡と実際の街路に沿った経路

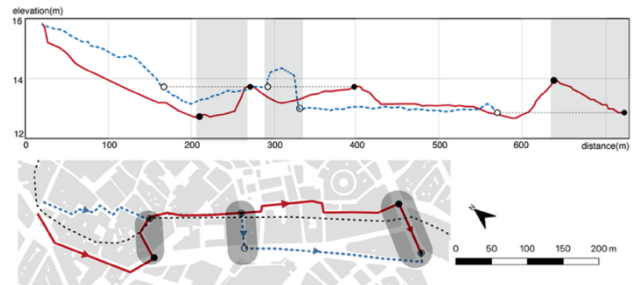


図4 中央市場付近の経路例とそれに沿った標高変化

4. 市壁完成後の解体史

4.1. 背景と目的

キリスト教市壁は15世紀の完成以降、解体まで大きな変化がなかったとして注目されてこなかったのに対し[1]、本章では完成～解体の間の市壁を挟んだ都市の変遷に焦点を当て、市壁の存在・解体と現在の都市空間の関係を明らかにすることで、市壁が完全に失われた跡地の観光価値を裏付ける。[3]の歴史地図および19-20世紀の都市改造に関する研究を参照した[15][16]。[8]があげた市壁外の周縁的活動にも注目する。

4.2. バレンシアの市壁周辺の土地利用変遷と観光価値

図5は既往研究や歴史地図を元にした変遷図である。14世紀から19世紀前半にかけてキリスト教市壁内側の空地は修道院で埋まった。そのほとんどは1836年の王令⁶で没収・個人に売却され、1884年には軍事施設等への転用で解体を免れたものしか残っていない。そのような修道院・病院跡地は旧市街で貴重なまとまった敷地として残り、戦後は博物館・図書館などの文化教育施設に生まれ変わった。この経緯から、文化観光施設は必然的に市壁跡地に沿って分布する。旧市街東端の Sant Doméneç 修道院周辺は防衛上重要な位置にあることから中世以来今日まで軍事拠点であり続け、例外的に観光地にならなかった。Quart 門南の El Pilar 地区は内壁沿いで唯一大規模な修道院がなく、庶民的な職人の街だった。この地区では拡張街路も内外の連続性に配慮して設計[15]され、壁内外の空間的差異がわかりづらいが、立地の周縁性と小ささゆえに売却を免れた宗教施設や広場が道路の内側沿いに見られる。また、開発圧力が最も大きい Colón 駅周辺では環状道路両側が一体化した繁華街のように見えるが、2つの大型デパートはとも

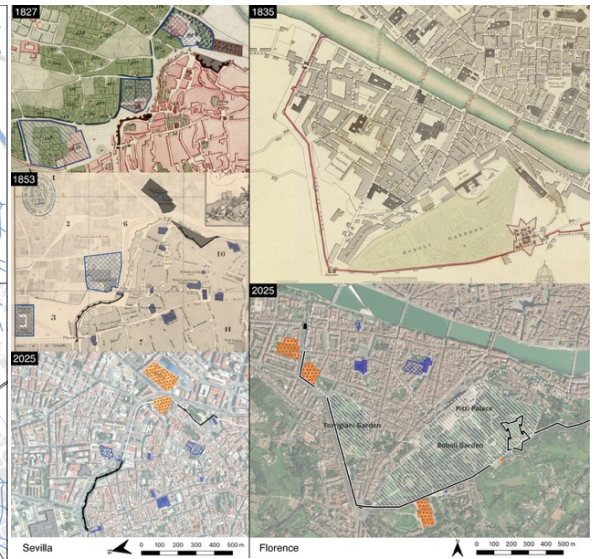
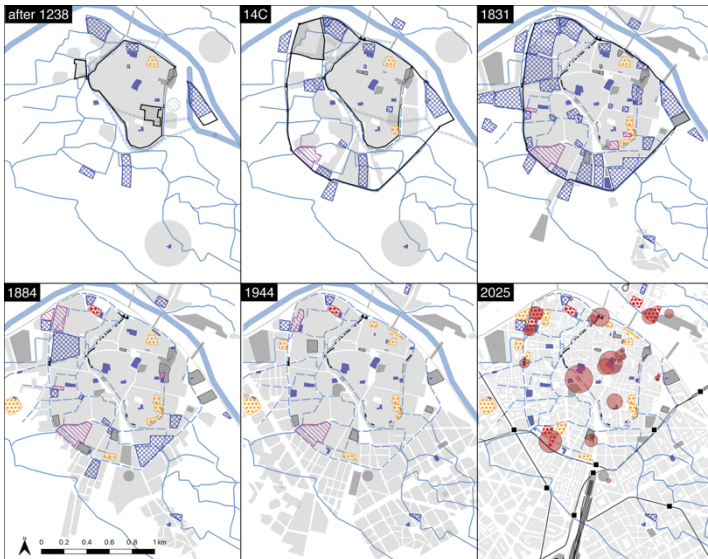


図 6 (左) 市壁解体前後の土地利用変遷

図 5 (右) セビリアとフィレンツェとの比較

に市壁内の修道院跡地に建てられており、ここでも旧市街の修道院跡地特有の土地利用スケールが残っている。北西川沿いの El Carme 地区にも同名の修道院があり、現在はその一部が博物館になったがそれ以外は停滞した発掘調査のため老朽化したままの建物が多く、[9]のいう放棄地区に近い状態だ。Serranos 塔よりも東の川沿いは整備され新しい建物に教育・研究機関が多く入っている。イスラム市壁にも目を向けると、現在の中央市場広場には歴史的に重要な街道の門があったことから、イスラム後期から街の重要な玄関口として栄えてきた。また、壁南端内側にはバレンシア大学図書館や博物館などの文化教育施設が固まっているが、この敷地は中世のユダヤ教徒隔離地区だった。修道院を経て考古学博物館になった Quart 門北部内側も、中世初期は隔離された公娯街とイスラム教徒居住区だった。

4.3. 市壁が残存した場所との比較

セビリアの12世紀ムワッヒド朝の市壁も19世紀に壊されたが、解体が段階的だったため一部残った。図6中央の Macarena 通り壁と右上の Valle 庭園壁はどちらも外側に緑地を携えて整備されている。前者の内側では環状道路に面する他の街区に比べ建物が小規模で古いものが多く、壁による分断が残っている。市壁が古いことから修道院は外側に立っていたが、転用され公的施設になった跡地の前では壁が壊された。Florence では中世後期の市壁がより大規模に残る。北岸の同じ壁は全て壊され環状道路になったが、南岸では大部分が丘陵地の私有庭園や王宮に面していたため緑地とともに分断構造がそのまま残った。街区に挟まれて残ったセビリアの Macarena 壁と解体されたバレンシアの壁の周辺を比較しても、街路の連続性という点では後者の分断が薄れているが、内側にのみ古い土地が残る点では市壁が失われても内外の異なる地域性が残っている。市壁が残る場所では物理的に視界が阻まれ遺構の鑑賞に終始しがちだが、市壁がない跡地は、内外で生まれた異なる景観を見比べながら歩くことができる利点がある。

4.4. 小結

空地だった市壁沿いに建った修道院が、市壁内飽和後に軍事・公的施設を経て大規模な公共空間などに生まれ変わ

っていた事実は2章で明らかにした多面性を歴史的に裏付けた。さらに、そのような土地の一部はさらに遡ると周縁化された人種や職業の隔離地区だったことも明らかになった。公共空間にならなかった場合も、市壁内外の歴史的格差は用途やスケールの差として痕を残している。完全に撤去された市壁跡地を歩くことには、周縁化された都市史や市壁跡地特有の空間格差を体験できる価値がある。

5. 結

市壁は一度築かれると数世紀にわたって都市境界を固定し、内外の空間的な格差を生む。市壁が解体された後も、この差異は歴史的遺産の分布、地形、および土地利用の境界線として残り続ける。市壁を見て都市を見ない従来の WW に対し、NLWW は「不在の市壁」という境界を介して、その両側に積層した都市の歴史およびその上に建つ都市の多面性を看取る観光である。本稿ではバレンシアのイスラム・キリスト教市壁を例として、それぞれに特有・共通する歩行ルートとしての価値を検証した。1章で触れたように、同様の歴史・規模・課題を抱える都市は多く存在しており、本稿の結果の他都市への応用は今後の課題として残されている。

(引用文献) [1]. Ferrandis Montesinos, "Las Murallas de Valencia: Historia, arquitectura y arqueología" Universidad Politécnica de Valencia, 2016.[2]. Martí Oltra, "A la una de Valencia" in Historia de la ciudad, vol. 2, F. T. Pastor and A. Gallico, Eds., Colegio Territorial de Arquitectos de Valencia, 2002, pp. 56-73.[3]. A. Llopis Alonso and L. Perdigón Fernández, Cartografía histórica de la ciudad de Valencia (1608-1944), Valencia: Universitat Politècnica de València, 2010.[4]. G. Devord, "Theory of the Dérive," Internationale Situationniste, no. 2, 1958.[5]. T. Edensor, "Walking Through Ruins," in Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot, Ashgate Publishing, Ltd., 2008, pp. 123-141.[6]. P. Smith, "Mythogeographic Performance and Performative Interventions in Spaces of Heritage-Tourism," University of Plymouth, 2013.[7]. L. Meier, L. Frers and E. Sigvardsson, "The importance of absence in the present: Practices of remembrance and the contestation of absences," Cultural Geographies, vol. 20, no. 4, pp. 423-430, 2013.[8]. D. M. Bruce and O. H. Creighton, "Contested identities: the dissonant heritage of European town walls and walled towns," International Journal of Heritage Studies, vol. 12, no. 3, pp. 234-254, 2006.[9]. G. J. Ashworth and J. E. Turner, The Tourist-Historic City, Belhaven Press, 1990.[10]. F. M. Yago, "La ciudad de Valencia como espacio percibido por los estudiantes universitarios," Estudios Geográficos, vol. 76, no. 278, pp. 203-233, 2015.[11]. D. R. Judd, "Constructing the Tourist Bubble," in The tourist city, Yale University Press, 1999, pp. 35-53.[12]. D. MacCannell, "Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings," American Journal of Sociology, 1973.[13]. R. Maitland, "Everyday life as a creative experience in cities," International Journal of Culture, Tourism and Hospitality Research, Vol. 4, No. 3, 2010.[14]. M. de Certeau, "Walking in the City," 著: The Practice of Everyday Life, University of California Press, 1984.[15]. K. Sakura and A. Okabe, "19世紀後半の地方中都市拡張計画における都市デザインに関する研究—スペイン・バレンシアを対象に—," 日本建築学会計画系論文集, vol. 78, no. 691, 2013.[16]. F. Pingarrón-Esaín, "Derribos, ventas y destinos de conventos suprimidos de la ciudad de Valencia y de los enajenados entre los años 1837 y 1839," ARS LONGA, Vols. 14-15, 2005-2006. (航空写真出典) Esri, Maxar

¹ スペインの文化遺産保護は国家法 (Ley 16/1985) を基礎に州法 (Ley 4/1998) で運用され、最高位の BIC (重要文化財) と地方レベルの BRL (地方重要資産) に大別される。
² Fundación Visit Valencia, "El turismo en cifras de la ciudad de Valencia 2024," Ayuntamiento de Valencia, Annual Tourism Report, 2024.
³ Cultural València, "Routes," Cultural València, 2022. [Online]. Available: https://cultural.valencia.es/en/routes/ (Accessed: Jan. 5, 2026).
⁴ (Source: Prepared by author based on OpenStreetMap data)

⁵ Ayuntamiento de València, "Padrón a 01/01/2025: Distrito 1, Barrio 3. El Carme," Oficina de Estadística, Ayuntamiento de Valencia, Statistical Report, 2025. [Online].
⁶ 1836年2月19日にメンディソバル主導のもと摂政マリア・クリスティーナが発した勅令。廃止された宗教団体の全不動産を国有化し、売却対象とすることを宣言した。